

福祉文化批評入門

—— 4つの文化の眼鏡を使った評論を書くために

藺田碩哉

●「福祉文化とは何か」という問いの問題

「福祉文化を研究する」というのが福祉文化学会の役割であることは、この学会の会員なら、研究者・実践家の別を問わず、誰でも当たり前のことだとお考えでしょう。しかし、それが具体的に何をどうすることなのか、何を対象に据えてどんな方法で研究するのかということになると、明確な答えを持っている会員は必ずしも多くないのではないのでしょうか。

かつてのこの学会には、福祉文化学会の課題は「福祉文化とは何か」という問いの答えを探ることだという考え方が広がっていました。「福祉文化」を看板に掲げる学会なのだから、まずは「福祉文化」を定義し、その意味と価値を明らかにすること—それが出発点ではないかと多くの会員が考えたのは自然の成り行きだったとも言えます。

ところがこの方向は袋小路にはまり込むことになりました。「福祉文化」についていろいろな論議を積み重ねても、みんなが納得する決定的な結論は出てきませんでした。多くの言葉が費やされましたが、論議は観念的になり、そうとも言えるが、ああととも言える、という状況になってしまいました。その一方で、研究大会や研究誌には、さまざまな報告や論文が提出されてきたのですが、それらがなぜ福祉文化研究なのか、という肝心のところがはっきりせず、一般の福祉研究とどこが違うのかわからない論文や報告、中には「福祉文化」という用語が一度も出てこないような論文も登場していました。

●発想の転換

これはどうやら問題の立て方がよくないのではないかという意見が出てきたのは10年ぐらい前のことです。従来の発想から抜け出して新たな福祉文化研究の枠組みを作り出すための模索が始まりました。その結果、次のような見解が打ち出されました。すなわち、福祉文化研究は**福祉文化の研究**ではなく、**福祉の文化研究**ではないのかという問題提起です。

「福祉文化の研究」と「福祉の文化研究」—「の」という助詞の位置がちょっとずれただけなのですが、前者の場合は「福祉文化」という何やら意味ありげな存在をはじめから前提にして論を進めようとしているのに対して、後者では「文化研究」という方法論が前に出てくるのが特色です。言い方を変えれば「福祉文化」という用語にこだわっていると先に進まないの、「福祉」と「文化」とを切り離し、社会福祉のあらゆる場面や課題を研究対象に置いて、それを「文化」という切り口で分析したり批判したりするのが「福祉文化研究」だと考えようという立場です。社会福祉を社会学的な方法で捉え直すのが「福祉社会学」、教育的な視点で見れば「福祉教育学」が成り立つように、社会福祉を対象にした文化学（文化批判）を「福祉文化学」として定立しようということです。

かつて、この学会の創設者である一番ヶ瀬康子先生は、学会の目指す方向として「福祉の文化化」と「文化の福祉化」というスローガンを打ち出されてきました。福祉と文化を安易に一体化するのではなく、福祉 vs 文化という図式で、福祉と文化が相互に批判し合う姿勢が重要だと言われたのだと思います。新しい福祉文化研究は、一番ヶ瀬先生のこの発想に基盤を置いているのです。

●「文化」という用語の多様性

ここで問題になるのは「文化」という用語が多様な意味を含んでいるということです。一方で「文化」は人間が生み出した価値あるもの一般を意味します。文化財とか文化遺産とか文化勲章などという時の「文化」は、明らかに特別な価値を含んでいます。しかし、他方では、もっと客観的に人間活動の特色を言い表す用法もあります。日本文化と欧米文化という時には、どちらが価値があるかを問題にするのではなく、日本人の生活の特色と欧米人のそれとを比較検討することが目指されています。「企業文化」という言い方がありますが、それは企業が特別な価値を持っているということではなくて、A社の企業文化とB社の企業文化には大きな違いがある、というように使います。つまりここでの文化はその集団が持つ特色や個性のことであり、それらを括る言葉として文化が使われているのです。「福祉文化」という用語を、特別に価値ある豊かなものとして捉え、「素晴らしい福祉文化」を追求するのも1つの方向ですが、福祉領域に見られる固有の価値観や一般社会とはいささか異なる行動様式を福祉に固有の文化＝福祉文化として分析することも可能です。「文化」という用語を一義的に使うのではなく、その多様性をそのまま生かして、社会福祉の現実をいろいろな文化的視点から見直してみようというのが新しい福祉文化研究の方向といえます。

●福祉を見つめる4つの眼鏡

社会福祉の全体を「文化」の視点から捉え直し、福祉と文化の相互批判を進めるのが「福祉文化批評」の立ち位置です。「文化」という用語は1つの意味に収まり切れない多義的なものですが、その中から次のような4種の「文化」を選び出し、それぞれの視点から福祉を見直していきます。それは比喩的に言えば、4つの異なる「眼鏡」を掛けて福祉を見ることだと言ってよいでしょう。

①価値志向の眼鏡（譬えとしては凸レンズの眼鏡）

この眼鏡は「文化」を人間的・社会的に価値あるものと捉える文化観に基づく眼鏡です。福祉現場の実践に中の「価値あるもの」に焦点化し、それを拡大し、細部を見つめます。優れた福祉実践に注目し、それを通じて実現した人間の権利、自由や創造性について考察します。

②福祉領域の特色が見える眼鏡（凹レンズ）

この眼鏡は事実を客観的に捉え、一步引いて全体の特色を捉える眼鏡です。パースペクティブ（見取り図）を描き、それを福祉以外の他の文化領域と比較しながら、福祉領域の文化＝福祉文化の特異性を明らかにすることに問題意識を持っています。

③「遊び」やアートを見つけ出す眼鏡（色レンズ）

この眼鏡は福祉領域の実践の中で、快樂原則に拠って立つ「遊び」的なもの、「美」への志向、その発展系としての芸術的な活動が浮かび上がってくる眼鏡です。福祉領域では従来等閑視されがちだった生活の美化や遊び化に焦点を当て、日常生活の中にあるアート（文芸、音楽、舞踊、造形、演劇など）の発見に努めます。

④福祉実践の背後に働いている力を見つめる眼鏡（透視レンズ）

この眼鏡は表面的には見えていなくても、福祉の世界にうごめいているさまざまな力（権力や利害や支配関係など）を注意深く追いかけて、現場を動かしている状況をより深い所から掘り下げて問題化しようという眼鏡です。文化社会学の方法として注目されてきた「カルチュラル・スタディーズ」につながる見方です。

●福祉文化批評の書き方

具体的なテーマを例にあげて、どんな「福祉文化批評」が可能になるかを考えてみましょう。ここでは昨今注目を集めている、地域の子どもに無償または安価に食事の提供をする「子ども食堂」を取り上げます。

①の「価値志向」の眼鏡で見ると、子ども食堂の果たしている大きな役割、それが子どもの健全な成長にとって重要な意味を持っていることが浮かび上がって来ます。成功している子ども食堂の活動内容を検討し、その運営の仕組みやそれに関わる人々を紹介し、子ども食堂の発展のために重要なことは何か、というような課題を考える評論が書かれるでしょう。

②の「特色を見つめる」眼鏡では、もう少し引いた視点から子ども食堂全体の状況を検討することになります。いくつかの子ども食堂を比較し、分類し、子ども食堂といっても、場所によって異なる文化＝特色を持っていることが見えてくるかもしれません。それらをまとめて子ども食堂の成果と問題点を指摘する評論が生まれるでしょう。

③の「遊びとアート」の眼鏡をかけると、子ども食堂の中での子どもたちの笑顔や楽しい会話や自然に生まれてくる遊びが目に入ってきます。子ども食堂のプログラムをもっと楽しく豊かにするためのアイデアが模索されるかもしれません。ともすれば暗く貧しくなりがちだった福祉の世界に「快」や「美」を発見し、あるいはそれらを創造し拡大することが批評の目標になっているからです。

④の「背後を見る」眼鏡は「深読み」を目指す眼鏡です。子ども食堂が求められる背景一家庭の崩壊や貧困化、それをもたらした社会の矛盾や対立を掘り下げて考えようとしません。子ども食堂の出現を自体も無条件に善とするのではなく、それが覆い隠してしまう不都合な真実に注意を喚起したり、子ども食堂の内部にもあるかもしれない支配や抑圧にあ

えて目を向けようとするでしょう。

これらの眼鏡は、どれか1つだけあればいいというものではありません。いくつかの眼鏡を組み合わせ、複眼的に見ることも重要です。福祉の現実を前後左右から文化的に点検し、真の問題を明らかにし、その解決の方向を考えるのが文化批評の役割なのです。

●福祉文化批評を書いてみよう

福祉文化学会の会員の皆さんは、実践者にしても研究者にしても、それぞれの現場で日々多様な問題や課題に直面していることと思います。そのうちの1つを選び、ここで紹介したような「眼鏡」を掛けて現実を見つめ直してみたいと思います。その結果、見えてきたものを文章にまとめてみましょう。その組み立て方は次のようになります。

- I 福祉に関わる1つの事象を紹介する（たとえば「子ども食堂」）
- II 眼鏡（視点）を選んでその事象を見つめ直す
- III 新たに見えてきたもの、それについての感想やコメント、アイデアや提案を書く。

こんなやり方で書かれた文章は、間違いなく「福祉文化批評」になっているはずです。文章の長さは問題ではありません。数百字のコラムでも、数千字のエッセイ（試論）でも、書けたらこの欄にぜひ送ってほしいと思います。お互いに書かれたものを読み合っ、福祉文化批評の批評もやってみましょう。その蓄積の中から、この国の福祉の現実を揺り動かすような、問題提起力のある報告や論文が生まれてくることでしょう。

*参考資料として『福祉文化研究』第24号(2015年)の特集「福祉文化研究の新地平」をごらんください。ここで書いた論議が詳しく展開されています。新しい研究方法を生かした多彩な報告や論文が掲載されています。

(そのだ せきや 法政大学大原社会問題研究所 日本福祉文化学会名誉会員)